第26回　日本福祉大学知多半島総合研究所歴史・民俗部研究集会
「近世常滑焼を考える」報告

2012 年 11 月 10 日に開催した第 25 回の研究集会では、中世の渥美・常滑焼についてのシンポジウムを行いました。

第 26 回は、研究蓄積の薄い近世の常滑焼について、その生産から消費までを歴史学と考古学の両面から検討しました。発表内容を特集として報告いたします。

◇開催日時　2013 年 11 月 9 日（土）10:00 ～ 16:00

◇場　　所　日本福祉大学半田キャンパス　101 講義室

◇内　　容　研究報告❶

「近世常滑窯の真焼甕類について」

小栗　康寛　氏（愛知県常滑市教育委員会）

研究報告❷

「近世常滑焼の生産と流通」

髙部　淑子　　（日本福祉大学知多半島総合研究所　教授）

講　　演

「近世考古学と近世史研究」

岩淵　令治　氏（学習院女子大学国際文化交流学部　教授 ）

シンポジウム

「近世常滑焼を考える」

コーディネーター　曲田　浩和（日本福祉大学経済学部　教授
知多半島総合研究所歴史・民俗部　部長）

パ ネ リ ス ト　上記報告者・講演者　３名
中野　晴久　氏（とこなめ陶の森　資料館　学芸員）

◇主　　催　日本福祉大学知多半島総合研究所

※組織名・肩書きはシンポジウム当時のもの。

【講演】近世考古学と近世史研究

学習院女子大学国際文化交流学部 教授　岩淵　令治

ただいまご紹介にあずかりました岩淵と申します。考古学と文献史学の両方に取り組んでいると過分なご紹介をいただきましたが、むしろ私は考古学徒の落ちこぼれみたいなものです。もともと縄文時代中期に関心があったのですが、発掘をきっかけに江戸時代に興味を持つようになりました。そうした経緯もあって今回お声がけいただいたのだと思います。

本日は、最初に「江戸時代の考古学のあゆみ」ということで、どのように江戸時代の考古学に関する調査・研究が進んできたかについて、お話しします。その上で都市江戸に関する多様な成果のうち、私が文献史学の立場からとくに関心を持ち、また学んでいきたいと思っていることを、ご紹介したいと思います。そのなかで常滑に関わることにも触れていければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめにー陶磁器のライフサイクル

まず、今回のシンポジウムに即しまして、「陶磁器のライフサイクル」についてお話ししたいと思います。これは、森本伊知郎さんが『近世陶磁器の考古学』（雄山閣、2009年）に書かれたことです。森本さんは、名古屋の椙山女学園大学で教鞭をとられておられましたが、惜しくも若くしてお亡くなりになってしまいました。私にとっては仕事でご一緒させていただいた先輩でした。森本さんは、もともと江戸における陶磁器の消費の状況に関して研究されていましたが、こちらに赴任されてからは、生産から消費まで通した陶磁器の流通について考古学の立場から研究されていました。本来ならば、私ではなくて森本さんがここに立っておられるべきだったろうと思っています。

さて、陶磁器のライフサイクル、つまり焼物が生産されて廃棄されるまでの流れは、大きくは「生産→流通→購入→使用→廃棄」ということになろうかと思われます。常滑焼に即して言えば、まず常滑で生産され、髙部淑子さんのご研究によれば、主な販売先である環伊勢湾地域と江戸に廻船で運ばれます。そして、江戸へ運んだ場合は江戸の問屋が仕入れて、江戸かあるいはさらに他の場所に運ばれ、仲買・小売を経て誰かが購入し、使って、捨てる、ということになります。

このサイクルにおいて、考古学が力を発揮するのは「生産」の部分です。また、消費でも最後の段階の、使い終わって捨てる「廃棄」の段階も考古学の強いところではないかと思います。「廃棄」というのはまさに最終段階で、江戸の場合は、ゴミ穴から出土するゴミということになります。ただし、常滑焼の場合、江戸という消費地で廃棄された陶磁器の中から常滑焼を特定することはなかなか難しく、今後の課題だとうかがっております。一方、文献史学の研究からは、本日は「生産」と「流通」についてお話があったと思います。

このように、まさに考古学と文献史学の両者を組み合わせて、陶磁器が生まれてから死ぬまでを復元していくということが、これからの研究を進めていく上で重要なわけです。さらに、使われ方を明らかにする際には民俗学も重要になってくると思います。ただし、おそらく復元が難しいのは近世の流通です。流通については文書も残っていますが、例えば江戸の場合だと、問屋の史料は残っていても、その先の仲買、あるいは一番庶民に近い小売に関する史料が残っていません。問屋から廃棄までの間を考古学と文献史学の両者で詰めていくわけですが、どこまで詰められるのか、ということが課題になろうかと思います。

こうした陶磁器のライフサイクルの中で、私の話は、消費地である江戸に関する近世考古学の成果の紹介ということになります。では、最初に「近

世考古学のあゆみ」を簡単にご紹介したいと思います（岩淵「近世考古学の進展と近世史研究」『江戸武家地の研究』、塙書房、2004年、初出は1991年）。

1．近世考古学のあゆみ

江戸時代が考古学の研究対象になってきたのは、それほど古いことではありません。1970年の考古学の学会で、中川成夫さんと加藤晋平さんより、近世についても考古学の方法で研究すべきであるということが提唱されました（中川成夫・加藤晋平「近世考古学の提唱」『日本考古学協会第35回総会研究発表要旨』、1970年。のち、中川成夫『歴史考古学の方法と課題』〈雄山閣、1985年〉に再録）。それ以前は、近世を考古学の対象として本格的に研究するという意識は高くなかったわけです。

（1）「近世考古学の提唱」以前

では、それ以前はどのようなものが調査・研究事例としてあったのでしょうか。近代的考古学の成立以前にも、江戸時代の集古会といった博物学的な関心や、国学の関心から古物の収集や研究が行われました。しかし、きちんとした調査は、1950年代末～1960年代に行われた増上寺の徳川将軍家墓所や大名家の墓所といった墓所の発掘が早い例です。しかも、先ほど伊達政宗のお墓の話が出ましたように、基本的には著名人の墓地の発掘が主でした。また、この調査は、日本人の骨格はどう変わってきたかといった形質人類学の関心によるところが大きかったのです。このほか、調査対象となったのが城、そして生産遺跡の発掘です。常滑には窯が残っていないということですが、瀬戸・美濃・有田などの陶磁器の窯は技術史・産業史、陶磁史の立場からも研究されています。また、東京では炭焼き窯などの発掘も行われましたが、どちらかといえば技術史・産業史の関心によるものでした。このように、1970年の「近世考古学の提唱」の頃まで、近世に関する考古学的調査・研究は、他分野からの関心を背景として、特定のテーマに沿ったもののみを対象とする、という状況だったと思います。

（2）「近世考古学の提唱」以降

このような状況の中で、1970年に「近世考古学の提唱」がなされたわけですが、実践にはすぐには結びつきませんでした。提唱者の一人である加藤晋平さんは、奮闘され、近世遺跡の調査を実施されました。

さらに、近世考古学の意義をめぐって大きなインパクトを与えたのが、1975年に実施された都立一橋高校地点の発掘調査です。最初は墓地で、その後は町屋に変わる場所だったため、墓地や裏長屋などが調査されました。とくに都市下層民の生活（とりわけ物質文化）や17世紀前半の墓制については、文献史料で明らかにできない点が多く、この調査は近世考古学の可能性を大きくアピールする機会となりました。当時、開発が進行した東京都心部において、江戸時代の遺構・遺物が良好な状態で残っているとはほとんどの方が思っていらっしゃらなかったのではないでしょうか。ですから、この発掘調査は近世考古学のいわば記念碑的な調査となったといっても過言ではないでしょう。

1980年代に入りますと、世はバブル期となり、中曽根康弘内閣の「民活」路線の中で、旧国鉄などが広大な土地を売却し、大規模開発が展開することとなりました。こうした開発に伴い、大規模な発掘調査も増えました。1980年代前半において、大きな成果をあげた調査の一つが、東京大学の本郷キャンパス内の発掘調査です（東京大学構内遺跡）。同キャンパスの敷地のほとんどは、江戸時代には加賀藩上屋敷をはじめ、複数の大名屋敷に該当していました。したがって、大学の構内で新たに建物を建てる際には、かなりの確率で大名屋敷の跡に当たるわけです。開発に伴う緊急調査であったとはいえ、研究・教育機関が開発主体・調査主体だったこともあり、調査・研究の方法においても、文献史学や自然科学との協業や遺物の編年の構築など、この調査は大きな成果をあげました。

その後は調査件数が増え、近世考古学は主に江戸を舞台に進展していきます。江戸遺跡研究会

(「江戸遺跡情報連絡会」として 1986 年に発会、1988 年に改称）など、学会も設立されました。そして、近世考古学をテーマとした企画展示の開催や、一般書の刊行も行われるようになり、発掘の成果がどんどん公表されていきました。一般向けの書籍としては、前述の都立一橋高校遺跡調査に関して古泉弘著『江戸を掘る』(柏書房、1983 年)が、東京大学構内遺跡の調査に関して藤本強著『埋もれた江戸』(平凡社、1990 年)が刊行されました。このように江戸が火付け役となり、やがて調査が全国化し、事例が増加していきました。また、江戸においては当初は大名屋敷の調査が多かったのですが、町人地や寺社地の調査も事例が重ねられていきました。12、13 年前のものではありますが、『図説江戸考古学研究事典』（柏書房、2001 年）は江戸の考古学の成果をわかりやすくまとめたものであり、一つの到達点となっています（＊付記　講演後、近年の成果をまとめた『事典 江戸の暮らしの考古学』吉川弘文館、2013 年が刊行されている)。

ただし、もともと多かった生産遺跡や城の調査は全国でも実施されていると思いますが、掘ってもわかりにくい田畑などはなかなか調査もされにくいわけです。町場はまだよいけれど、集落などの調査が低調なのも全体的な傾向だと思います。こうした中で、墓に関しては、最近は大名墓研究会が立ち上げられるなど、「お城の次は大名のお墓を研究するのだ」という状況もあります。

また、バブル崩壊後は発掘件数が非常に減っています。文化財保護法の改変など、そうした中で江戸の調査はなかなか実施しにくい状況にあることも事実です。

以上のような流れの中で、私自身の専門である都市江戸、とくに武家地や町人地にひきつけて、実際の成果事例を４つほどご紹介したいと思います。なお、私は 2013 年３月まで国立歴史民俗博物館に勤め、常設展示の江戸時代の展示室（第３展示室）のリニューアルに携わりましたが、とくに都市の展示（「都市の時代」）で近世考古学の成果を反映することをこころがけました。ご関心があれば、ぜひご覧いただければ幸いです。

２．都市江戸に関する調査成果に学ぶ

（１）土地の造成

まず最初にご紹介したいのは、土地の造成です。よく知られておりますように、江戸は大規模な埋め立てによって造られました。これをどのように実施したかということが、考古学の調査・研究より明らかになっています。

たとえば、江戸川・神田川は、とくに元和２年（1616）と明暦大火前後（1658 ～ 61 年）に大規模な流路変更が行われるのですが、その普請の詳細が発掘調査で明らかになりました（後楽二丁目南遺跡)。私自身、文献調査で参加させていただき、主に地誌や幕府の記録で大規模な工事の概要を確認しました。とくに万治３年～寛文元年（1660 ～ 61）については、仙台藩伊達家が大規模な普請を担わされたことが出てまいります。しかし発掘調査から、実際には工事が頻繁に行われていたことがわかったのです。さらに、神田川の流路をいろいろ変えるため、水を逃がすための水路を造っていくのですが、何度も失敗していることが判明しました。このように、大きな工事は記録に残っていますが、細かい工事や、その後の不安定な状況などは残っていません。ところが、実際に発掘するとこうしたことがリアルにわかってくるのです。

また、こうした普請は、江戸が造られるときに行われたという印象が強いのですが、実際には、その後も江戸でさまざまな普請が行われています。

例えば、江戸城の石垣を発掘したところ、崩落と修復を繰り返していたことがわかりました。崩れた跡を土留めした杭や、水を逃がすために補助的に造った水路が確認されたのです。

大名屋敷の造成についても明らかになっています。新橋駅の東側、現在は汐留シオサイトが建っている場所は、鉄道発祥の地として有名ですが、江戸時代には仙台藩上屋敷・龍野藩上屋敷・会津藩中屋敷がありました(汐留遺跡)。各藩の屋敷は、大規模に海面を埋め立てて、大造成をして造られていました。文献上でも多少の経過はわかりますが、実際どのように土留めをして土を入れていくかということは、やはり考古学の側から見ないと

わかりませんでした。土を入れては土留めをする、そういうことを繰り返しながら徐々に造っていくわけです。最初は水はけも悪いので船のドッグ（舟入場）として、さらに庭園の池を設けながら、だんだん造成していきます。こうした状況が実際に発掘することで初めてわかってくるのです。

また、江戸城の外堀のあたりの大名屋敷についても、台地と谷の繰り返しとなっている原地形を大幅に改変して造成していったことがわかってきました（紀尾井町遺跡ほか）。例えば、なだらかな斜面を1回削って、この土で谷を埋め立てて台地を造り、あるところは溝にするわけです。この際には粘土を入れて突き固め、また土を入れるということを交互に繰り返します（版築）。また同様に、前述の本郷の加賀藩上屋敷（東京大学構内遺跡）でも、江戸時代の谷をかなり埋め立てています。さらに、火事で焼けると嵩上げするかたちで土地が造られています。

このように、江戸時代を通じて、かなり自然地形の改変が行われていたのです。町人地を造成するときに、日比谷入江を埋め立てたということはよく言われますが、実はあちこちでこういった微細な土地の造成が行われたのです。さらに土地利用が変わると、また造成が行われています。以上のような造成の事実、またその技術が明らかとなったことが、考古学における成果の一つだと思っています。

もう一つは、江戸時代の災害との関係です。江戸の災害というと火災がすぐ連想されますが、実際には水害も大きな問題だったと私は思っています。火災が過密な居住状況から起こるという意味で人災だとすれば、水害というのは、都市においてさまざまな造成をしたことによる自然からのしっぺ返しといえるでしょう。よく江戸は「水の都」で水路が発達していると言われますが、さきの江戸川・神田川の造成をはじめ、実際には自然の地形をかなり改変しているということでもあるのです。そのしっぺ返しとしての水害というのは見逃せません。これも考古学の成果から気づいたことです。江戸城の堀の石垣の崩落と修復を見ましたが、いかに都市としてメンテナンスを常に行っていたかということが考古学の成果からうかがえるのです。

（2）ゴミ処理

発掘調査の成果の二つ目は、ゴミ処理の実態、つまり都市の生活環境の解明です。こちらは、本日の常滑焼の話にも少しつながります。

1986年に実施された新宿区四谷の三栄町遺跡の調査は、衝撃的でした。発掘地点はＪＲ四谷駅の近くで、現在は新宿歴史博物館が建っております。この博物館の建設工事に伴って、発掘調査が行われました。

この地点は、幕末の絵図で「御持組」などと書かれておりますように、江戸時代は幕府の御家人の屋敷地でした。幕府の武家屋敷の管理記録（国立国会図書館蔵「屋敷渡絵図証文」）にも、「御持組の〇〇」など、御家人が住んでいる屋敷であったことが記載されています。ですから、ここを調査すれば当然御家人屋敷の跡が出てくるはずです。

しかし発掘を進めてみると、18世紀後半頃からひたすら穴が掘られており、実際には建物が建っていたとは考えられない状況であったことがわかりました。階段がついた地下の倉庫（地下室（むろ））もありましたが、大半はゴミを棄てるための穴でした。つまり、ここは御家人の屋敷跡ですが、実際には穴だらけで、「ゴミ捨て場」だったのです。絵図や史料を見る限りでは御家人の屋敷なのですが、発掘によってゴミ捨て場であった実態が明らかになったわけです。

ここから出土した「ゴミ」の中で、陶磁器に注目してみましょう。目立つものとしては、「くらわんか皿」・「くらわんか碗」という安手の磁器の皿・碗があげられます。また、美濃の高田で焼いている高田徳利、通称「貧乏徳利」と呼ばれるものも大量に出ています。面白いのは、欠損が少なく、むしろ完全な形に近いものが多い点です。

江戸時代のリサイクルということで、焼継屋が割れたものをガラスを溶かしてくっつけて修理していたという話から、「江戸時代の人は焼物を大事に使っていた」という評価が一般化しています。しかし、近世の遺跡の出土品には、焼継されたも

のもないわけではありませんが、むしろ完全な形のものや、修繕せずに捨てられているものが多いのです。

そしてもう一つ注目したいのは、欠損がないまま廃棄されている徳利が、「量り売り」で用いられるいわゆる「通い徳利」だということです（岩淵「江戸住大商人の肖像－場末の仲買　高崎屋の成長」 斉藤善之編『新しい近世史』第３巻、新人物往来社、1996 年）。お店が自分の店印や屋号を入れた徳利をお客さんに貸し出し、お客さんがその店に携えて通うはずの徳利が、当たり前のように大量に捨てられていたというわけなのです。

三栄町遺跡の事例は、「ゴミ捨て場自体が不法投棄に近いものであったのではないかという問題」、「近世後期の江戸では陶磁器が実際にはあまり修理されてリサイクルしていないこと」、「リターナブル瓶が店に返されていないこと」を示していると思います。

江戸のゴミ問題につきまして、少し文献史料もみておきたいと思います（岩淵「江戸のゴミ処理再考－“リサイクル都市”・“清潔都市”像を越えて」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 118 集、2004 年）。とりあげますのは、元禄 13（1700）年 10 月の江戸の町触です（『江戸町触集成』3650）。江戸市中のゴミ処理はかなり整備されたイメージで語られることが多いかと思います。たしかに、江戸湾の永代島（のち越中島）へゴミを運んで捨てるというシステムがありました。しかし、この町触では、永代島に運送中の船から別の船へゴミの一部を移し、残った石や瓦を海中に投棄することを禁じています。ここからわかることは、石や瓦を不法投棄していたということ、そして不法にゴミの一部が選別されて、他に運ばれていたということです。町触では明示されておりませんが、この選別されたゴミは、現在の船橋市・習志野市・千葉市の海岸で荷揚げされ、内陸部の村々で肥料として使われていました。こうしたゴミ肥料の移出は近代にも続きますが、大正期になると衛生の問題から、千葉側では東京のゴミを拒否する動きがあらわれ、昭和以降に農家に堆肥肥料の自作を推奨する政策もとられたことで、やがて消滅していきます。つまり、よく江戸の町からは生ゴミは肥料にするから出ないというのですが、実際には商売になるほど生ゴミが発生していたこと、そしてその肥料として利用すること自体に衛生的な問題があったことがうかがわれるのです。

このように、江戸ではゴミ捨てのシステムが徹底していたとは必ずしも言えません。「江戸はリサイクル都市である」とか「清潔都市、エコ都市である」と言われることが多いのですが、システムはあっても、実際にはゴミの不法投棄があり、また生ゴミの発生もあったわけです。また、リターナブル瓶も店に返っていません。そして、修繕して大事に使うという話も実際にはどうだったのか。考古学で取り上げるゴミというものは、その実態を如実に語ってくれるのではないかと思っています。

（３）裏店の人々の死

近世考古学の成果の三つ目は、裏店の人々の墓制です（西木浩一「墓標なき墓地の光景」竹内誠編『近世都市江戸の構造』三省堂、1997 年）。新宿区にあった圓応寺の跡地を調査したところ、２つの墓域が出てきました（Ａ区、Ｂ区とする）。Ａ区の墓域では、35%の棺に甕棺が使われ、棺と棺の間には遺構が確認されない空間がありました。この空間はおそらく参道と考えられます。一方、Ｂ区の墓は、円形の木製木棺（早桶）が用いられていました。そして、こちらには道がまったくなく、おびただしい早桶が重複して出てきました。また、Ａ区では約６割の棺に副葬品が見られたのに対して、Ｂ区ではほとんど副葬品の埋葬は確認できませんでした。埋葬された遺体の男女比もＡ区が 2.7：１であるのに対し、Ｂ区は 7.8：１と男性の割合が格段に高いのです。

先ほどの報告のなかで「甕棺を使うのは武家」という話がありました。大名、また大名の奥さん、旗本クラス等のほか上層町人も甕棺を使いますが、甕棺を使う墓というのはやはり被葬者の「家」もしっかりしており、お参りもきちんとしているわけです。それに対して、早桶を使っているのは、裏店の人々だったと思われます。

よく遊女の悲惨さを示す例として、「投げ込み墓」があげられます。遊女は身寄りがないため、亡くなると一つの墓穴にどんどん放り込まれる、ということなのですが、この裏店の人々の埋葬のされ方も早桶に入れられるものの大差はないわけです。裏店の住民は単身者が多く、家族がいても「家」が永続していくのは経済的にも困難です。ですから、きちんとお参りしてもらう前提では埋葬されなかったのだと思います。そういう意味からすると、常滑の甕はきちんとした「家」のある階層の棺として使われたということになるのでしょう。

（4）消費からの視点

発掘調査の成果としてご紹介する最後の事例です。冒頭で触れましたように、発掘で出てくるものは、最終的な消費地で「廃棄」されたものということになります。つまり、「消費」の一端を読み取ることができるわけです。「生産地で何をどのように作っているか」はもちろん大事ですが、もう一つ重要なのは、「実際に人々がどのようなものを使っていたか」ということです。現代でも実際の生活では、洋食器や和食器等いろいろなものを混ぜて、あるいは昔からあるものと新品、高いものと安手のものを組み合わせて使っているわけです。そういう意味では、実際に買った人はどのように使っているのか、あるいは消費地としてはどこから持ってくるのかという、使用の実態というのが重要になってくると思います。それがわかるのが消費地の遺跡の良いところなのです。

冒頭でご紹介した森本伊知郎さんは、「消費地の編年」を体系的にまとめられました。こちらによりますと、東日本、江戸の大まかな傾向は次のようになります。まず、「肥前系陶磁器」つまり有田が当初はかなりのシェアを占めていました。ところが、肥前系は18世紀中～後半になると少しシェアが落ちてきます。一方、高級茶陶の製作から始まった瀬戸と美濃は、全国化する中で器種が日用雑器に移ります。そして、18世紀から生産が増えて、尾張以東で増加し、江戸では17世紀後半から18世紀にかけて、飛躍的にその割合が増えるのです。

また、京・信楽系の焼物は、京都や大坂では増えますが、尾張以東ではあまり増えないという傾向を指摘されました。この点について、森本さんは「人為的・政策的なコントロール」を想定されています。つまり尾張藩領内では、法令によって有田のものはあまり使わせないようにして、瀬戸・美濃系を使わせるというわけです。また売る場合は、京焼との競合関係を避けて、京都の方では瀬戸・美濃をあまり販売せず、東の方に持っていったのではないかということです。私は不勉強なのでわかりませんが、こうしたことを常滑に置き換えてみた場合、一つはそういった「販売戦略」がテーマとしてありうるのではないかと思います。

一方、消費に関しては、実際に消費者がどのような割合で何を使っていたかが重要です。しかし、常滑焼についてはなかなか破片からの特定の難しさもあって、現状ではあまりわかっておりません。さきほど、髙部さんがご報告されましたように、常滑焼の販売先として江戸が重要であったことは文献史料で確認されました。しかし、発掘で出てきた「ゴミ」からはあまり確認できません。この点は、今後も研究課題になるのではないかと思います。また、悩ましいのは、江戸に移出されたものが全部江戸で消費されているかというと、実はわからないわけです。問屋がさらに他の仲買に売るとそこから広がる可能性もあるからです。こういったことも今後の研究の課題になってくるのではないかと思います。私の夢は、小売の史料や仲買の史料が出てきて全部がつながることですが、なかなかそういう幸せな目には当たりません。大森貝塚を最初に発掘したことで著名なモースの収集品には、ある焼物屋さんの模型があります。店の中にぶら下がっている土瓶等に常滑焼があるのかどうかは私には判断できません。こういう小売の世界がわかると、「陶磁器のライフサイクルが全部つながるのになあ」といつも思います。

このように、江戸の遺跡のゴミからは常滑焼があまり確認できないのですが、他の都市遺跡における常滑焼の出土の割合を、森本さんの研究成果からみてみましょう。たとえば、名古屋城三の丸

遺跡（Ⅰ）では、17 世紀前半～ 18 世紀、19 世紀と、常滑焼はコンスタントに５％弱程度出ています。あるいは、遺構の性格が違うのかもしれませんが、名古屋城三の丸遺跡（Ⅶ）では、1750 ～ 75 年の時期には約３割とかなり割合が高くなっています。また、清洲城下町遺跡五条橋地区では一時期を除いて 15 ～ 35％と、かなりの常滑焼が見つかっています。一方、小田原城などではほんの少ししか出土せず、静岡県等でもあまり出土していません。なお、東京の「府中市　府中宿（武蔵国府関連遺跡）」という 18 世紀末～ 19 世紀半ばにかけての遺構においては３％と、常滑焼が少し出てきております。

いずれにしましても、常滑焼の消費の実態を明らかにするには、文献史料の限界や、また遺物における産地特定の問題が今後の課題であると思います。

なお、消費地の嗜好や流行は、生産にも影響を与えるという点で、重要です。髙部さんからもお話がありましたが、「常滑でこういうものを作ってほしい」という注文があったということからも、そうした状況がうかがえます。たとえば、考古学の長佐古真也さんは、前述の貧乏徳利とか美濃で焼いている徳利、つまりリターナブル瓶が爆発的に増えていくことと、酒の需要や江戸の裏店層が増えていくこととが一致していると推測されています（長佐古真也「近世『徳利』の諸様相」『江戸の食文化』吉川弘文館､1992 年）。都市の需要、あるいは都市の消費というものが生産に与える影響もあるのではないか。こういったことも含めて、「生産」から最後の「廃棄」まですべて、いつの日か復元できたらいいなと思っております。

最後に、消費地における常滑焼の利用として、本日、甕棺と植木鉢のお話が出ましたので、この場で少し話題を付け加えさせていただきます。

甕棺につきましては、八戸藩六代藩主南部信依の正室信行院の葬儀の関係史料で、甕を買う指示が記載されています（岩淵「大名家の江戸菩提所」『江戸の大名菩提寺』、港区立郷土資料館、2012 年）。これによりますと、常滑焼かどうかはわかりませんが、「瓶は一番でも小ぶりなので、装束瓶と申すものを使え」とあります。「一番」は商品の型番のようなものなのでしょうか。とにかく、この場合は、甕棺は「装束瓶」というものが最適だということです。葬式業界では「一番」や「装束瓶」という規格が言葉として存在しているようです。小栗康寛さんの報告では「規格化」というお話がありました。こちらは大名家の葬儀に関することですが、どうもユーザー側の言葉があったようです。

また、植木鉢については、朝顔や菊の育成をしていた八戸藩の江戸勤番武士の 19 世紀の買い物の記録の中に、１つ 120 文の植木鉢が出てきます（岩淵「八戸藩江戸勤番武士の日常生活と行動」『国立歴史民俗博物館研究報告』138, 2007 年）。しかし、髙部さんの報告の史料によれば、常滑焼の植木鉢は安くても銀 10 匁ぐらい、高いものでは金１両もしています。常滑焼の植木鉢が一体どのようなものだったのか、ちょっと想像がつきません。ちなみに、園芸関係の「おもちゃ絵」や、園芸書、絵画資料等では、植木鉢の姿を確認することができます。これらをみますと、突然変異の奇抜なもの（「奇品」）のうち、万年青や松葉蘭など葉を楽しむものは植木鉢が派手な場合があります。一方、朝顔、桜草など花を楽しむものでは、孫半斗という無地の地味な鉢を使っています。半胴甕を半斗といい、さらに小さいので孫半斗と呼ぶのでしょう。こうしたものの中に、常滑のものが入っていた可能性があるのかもしれません。ただ、浅草の方で焼いている今戸焼でもこのような半胴甕を作っているので、常滑なのかどうかということも今後の研究課題だと思います。そういう意味では、本日は髙部さんに、良いヒントをいただいたと思っています。

３．おわりに

本日は、江戸に関する考古学の調査・研究成果をいくつかご紹介することで、シンポジウムのテーマである常滑焼のことにも近づいてみようと思いながらお話ししてまいりました。

江戸の考古学は、かなり市民権を得たと思うの

ですが、一方でいまだに「江戸時代は発掘の対象なのか」と思っている方もおられます。私は、「文献史料は増えても、考古学は大きな意義を持つ」と思っております。

今回、４つのテーマをお話致しましたが、文字に書かれ、絵画に描かれることは何らかの動機があるわけで、こうしたあまりに日常的なことは文字にも絵にもならない場合が多いのです。そういう意味で、日常性を知るにはやはり考古資料は非常に強い力を発揮すると思います。江戸の場合、文書史料や絵画資料はそもそもあまり残っていないので、そういった意味でも考古資料は非常に強い力を持っていると言えます。

さらに、発掘調査の意義の一つは、「地点史」の解明という目的のもとに、諸学問の交流の場を産み出すことにあると思います。考古学の場合、とくに行政発掘、記録保存となりますと、遺跡の破壊を契機に調査が始まります。掘るときは、その場所に何か意味があると考えて掘るというよりも、「その地点をとにかく掘る」ということから始まるわけです。遺構が存在すれば、そこに関する文献史料があろうとなかろうと、あるいは有名な場所であろうとなかろうと、「とにかく掘る」ということから始まるわけですが、そこを掘ったことにより意外なことがわかってくるのです。前述のように、御家人の屋敷がゴミ捨て場だったなどということは、まさに開発によって調査地点が設定されたことではじめてわかったことなのです。

そしてこのことが、学際研究のきっかけになることもあるわけです。まったくそれまで気にしていなかった土地、地点に関する文献史料や絵画資料で思わぬ発見がある場合があります。さらに、いままで気づかなかった論点や視角を得ることがあります。

たとえば、都市史研究のテーマとして「武家地研究」がありますが、本格化したのは発掘調査がきっかけでした（岩淵『江戸武家地の研究』）。従来は、町人が成長し、武家の都市から町人の都市になっていくということのみが強調されてきましたが、実際には武家は都市のなかで非常に重要な存在です。当初、近世考古学における発掘事例が多かったのは、武家屋敷、武家地の発掘でしたが、その頃はあまり文献史学の研究者は武家地の研究に取り組んでいませんでした。考古学から刺激を受けることによって、武家地研究は本格化したといえるでしょう。

また、「消費」の問題も、私自身は発掘調査から影響を受けております。消費地の動向は、「生産」や「流通」にも影響を及ぼしていると思っています。

最後に、こうした機会ですので、少し背伸びをしてお話ししたいと思います。

著名なフランスの歴史学者フェルナン・ブローデルは、歴史というのは短期的にいろいろ変わってくる「短い歴史」と、長いスパンで変わってくる気候等のような「長い歴史」というものがあると述べています。そのなかで、長い歴史の一つはやはり「日常性」です。要するに、人間の生活などはある日突然変わるわけではないわけです。物質文明や生活というのは、まさにそういう長い歴史における一つの部分です。例えば、ものの場合には特権的なものがあって、贅沢が通俗化して、そのことが権威の象徴ではなくなってくると普及するわけですが、そういうことが繰り返されていきます。「余裕と必需」、あるいは「余裕と通常」というものが常に繰り返し起こっていくという、そういった日常性における物質文明というものがあるのだ、という話です（フェルナン・ブローデル『日常性の構造』１・２、みすず書房、1985 年）。

こうした意味で、常滑焼というものを通じて、人の生活や嗜好、あるいは生産などさまざまなことがらを考えていくことは重要なことではないかと思っています。

以上で、私の話を終わります。ありがとうございました。